

キャンパス・コラム

祭りに酒はつきものか！

このコラムが刷りあがっている頃、このテーマのシンポジウムは終わっています。私の意見は当然つきものです。古来から「直会（なおらい）」というお供えもので酒宴をしていた歴史があります。

しかし、ここ15年来の本学における「酒騒動」は、少し行き過ぎの感があります。特に、「一気飲み」についてはシンドロームとっていいほどの状況になっているようです。何が原因か？ 多様な原因があると思いますが、「酒を飲む責任」をもっと真剣に考えることが大切なことだと感じています。

かつて、女子テニスのトーナメント(ドイツ)でセレスチュ(米)選手がグラフ(ドイツ)選手との試合中に観客にナイフで刺される事件が起きました。この事件を報道したアナウンサーが

「犯人が酒を飲んでいてしかたがない」というニュアンスの表現をしたというのです。これを聞いた私の友人(ドイツで7年間生活)が、「こうした事件を起こしたら、まずアルコール中毒者ではないかというような観点からチェックされるだろうし、そもそも酒を飲んで前後不覚になることがほとんどない」というのです。これは、自己責任の事例のひとつであると思います。

ここ数年、たばこの分煙問題など日本の社会も生活環境の改善に目が向けられるようになってきました。わが中大キャンパスも少しずつ環境整備がすすんでいます。もうここらあたりで、酒にまつわる話題がなくなってもいいのではないのでしょうか。

祭りに限らず、酒は多様なものの潤滑油として機能してほしいものです。

広報委員 森 正明(文学部助教授)

シドニー五輪の水泳会場で、OBの方たちが中大の旗を振っていた光景がテレビに大写しされました。見た方も多かったと思います。とにかく「中大」の名が世界中に流れたのですから、悪い気はしません。その時の模様を鈴木学長と水泳部長の松本先生に「観戦記」として書いていただきました▼先日、学校に選手報告にやってきました。4人のうち3人を中大勢で占めた女子400メートルレーリレーに話が集中。学長が「神がかりの泳ぎ」と表現されたようにアンカーの源選手が3位に食い込みました。テレビ観戦のわれわれも、鳥肌が立つほどの熱戦でした▼さっそく、図書館前とモノレール駅に張られた「おめでとう」の横断幕を見て、ある学生が「え、これみんな中大の選手なの？」と知っているのには、ガツカリもしましたが……。でも、それほど中大パワーが大きかったのは事実です▼私たちは皆さんから「たくさん元気」をもらいました。さまざまなプレッシャーとの闘いは相当なものだったと察します。(広報課)

編集後記

Hakumon
ちゅうおう

2000・11月号(第161号)
2000年(平成12年)11月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12
電話 03-3631-8141